

良遍の唯識觀の特異性

——『真心要決』を中心として——

島田健太郎

一、

平安時代後期から鎌倉時代にかけては、日本の仏教の大きな転換期と言えるだろう。この時期は、特に鎌倉新仏教諸宗派の教義に明確なように、中国仏教には見られない日本仏教独自の展開が急速に遂げられるが、同様の傾向が奈良時代以来の南都旧仏教諸宗派においても認め得る。例えば華嚴宗の高弁や法相宗の貞慶などは、衰微した教学の復興を図ると共にその教学を時代思潮に応じた独自の観点より捉え直すことを試みている。

本論文では日本仏教の展開の一側面として、旧仏教諸宗派の中から法相教学を取り上げ、特に良遍の教学を中心に考えていく。良遍は法相教学復興期の最後期に属し、その教学はそれまでの教学復興の機運を受けて、伝統的法相教学よりすれば、かなり特異とも言える説を展開する。その際、その特異性は良遍が観心による実

践面を強調する点に最もよく表われていると思う。それ故、観行を中心に論じている『真心要決』から良遍の修行論を中心に考察することで、良遍の唯識観の特異性が奈辺に存するのかわかるといえる点を探らねばならないと思う。

二、

修行を重視する姿勢は、貞慶など復興期の法相教学全体に通ずる特徴でもある。それまで南都仏教諸宗派はいわゆる学問仏教であり、そのため行の観点はおよそ見落とされがちであったが、この行の問題は、貞慶に至って強く意識され始め、このことは僧風の刷新による宗門の復興を意図するということだけでなく、この時期に教会上において悟りの問題が前面に押し出されてきたことを意味するものと思われる。なぜなら、行は真如を悟るためのものであり、悟りの内容、つまり真如観と切り離して論じ得ないからであり、むしろ真如を如何に悟るかという問題意識の下に行の重要性が主張せられたと考えられよう。そしてまさにこの様な問題との関連において、貞慶は道理真理説を体系づけるのである。⁽¹⁾

貞慶は道理真理説を事・理・如の三重説を以て説明する。伝統的法相教学では事理の二重説に立ち、その時事は三性中の依他起性であって、因縁生起した方法、すなわち有為の事相とされ、理は真如、すなわち無為法として無相なる理性と考えられていた。貞慶の道理真理説は、伝統的法相教学の事理二重説における事を道理と事相とに分け、その道理を即真理と見做すことにより、無為の理性たる如（二重説では理）へのいわば架橋

として道理を捉えるというものである。これを行の観点より見た時、まず観ぜられるのは有為の事相の道理であり、それ故道理は真如（貞慶は『真理抄』の中では一心と呼んでいるが）⁽²⁾を悟るための一種の方便として考えられているのである。貞慶はこの道理を法爾道理と捉えていたようであるが、いずれにせよ、この道理真理説は鎌倉期法相教学における理の概念の変化を端的に示しており、これは行を重視するという貞慶の姿勢がその様な教学上の変化となつて表われたものと考えられよう。なぜなら道理真理説は、道理を方便として捉える以上、行という実践の問題抜きには論じ得ないからである。

良遍も基本的には貞慶の思想を継承しているが、両者の間にはなお幾分かの相違が見出せる。それは両者の道理真理説に端的に示されているが、道理真理説は行と密接な関係を有する以上、その違いは両者の修行観の相違に起因しよう。いわば良遍の修行観が貞慶の道理真理説と、ひいては真如観との相違をもたらしただけであり、そこには良遍が行を中心として法相教学を捉え得る独自の視点が関わっているのである。そこでまず良遍教学の全体的構造について言及したい。

良遍は『真心要決』の冒頭で「尋其大途源從三門一出。所謂三性三無性也」⁽³⁾（P 207上）と述べているように、教学全体を三性門と三無性門との相対を以て捉えている。そしてこれを自己の思想のいわば基礎的構造として積極的に活用している。『真心要決』ではその後この両門の順不が示されているが（P 208上）、それを良遍の記述に従つて図示すれば次の様になる。

三性門 || 表詮法門 | 有相 | 事相 | 学解 | 染法 | 詮門 | 識 | 因位 | 化他 | 観照 | 差別 | 性相決択 | 百法
 三無性門 || 遮詮法門 | 無相 | 理性 | 修行 | 浄法 | 廢詮 | 智断 | 果徳 | 自証 | 止寂 | 一味 | 融通無礙 | 一心

この両門の順不はまさに良遍教学の特徴を端的に示しているが、その中で最も特徴的であるのは、三性門を事、三無性門を理に配して、三無性門の理の立場を強調することであろう。伝統的法相教学では事理は三性中の依他起性と円成実性を指し、その関係は不即不離とされている。ところが、この両門の順不よりすれば良遍はこの事理の関係を三性門—三無性門の相對に適用し、三性の事理の関係を崩すことなく、その事理の相對を包摂する、より大きな事理の関係を考え、それを三性門と三無性門の相對という形に置き換えているのである。ここよりすれば良遍の教学はいわば事理の二重構造を有していると言えようが、それ故この両門の關係は不即不離であり、「今此二門二而不二。一而不二」（P 207上）と説明されるのである。

この時、修行は三無性門に配される。良遍は『真心要決』においては「付之案之我宗修行順入無性門一哉」（P 208）と特に修行だけを取り出して言及していることから明らかな様に、修行を非常に重視する。そしてこれは三性門—三無性門相對の中、三無性門の立場に立って行を修することに他ならない。そこでこの三無性門の修行とはどのようなものか、次にそれを見てみたい。

三、

まず、三無性門の意については次の様に述べられている。

凡此門意。一切諸法皆無自性。無生無滅本來寂靜自性涅槃。其無生滅之一法者卽是一心。（P 208下）

あるいはまた「無性門意二性皆空無生無滅本來涅槃。其本來寂無生體者卽是一實廢詮談旨眞如理也」（P 210上）

と述べられているが、この両文は内容的には同義であるので、ここから良遍は三無性門において示される理を真如の理とも一心と呼んでいることがわかる。この時、この一心は「萬法皆如而攝_レ在於一心_レ故」（P 208下）と言われ、一切の事相を包摂するものとされている。さらには「當_レ知諸法唯是一心更無_レ別法」（P 232上）とも説かれており、この記述よりすれば、良遍の三無性門の立場は諸法（_レ事相）を一心（_レ理性）に帰する、いわば攝相帰性によるものと言えるだろう。また良遍は「其一心者即無分別離_レ文字_レ法。一切善惡都莫_レ思量_レ胸中更不_レ置_レ於一物_レ」（P 208下）と述べて、一心が無分別の法であることを明かしている。一心は無分別であるから一切の思量は排される。それ故この一心を良遍は無心之心とも無念とも言うのである。良遍によれば、この一心を覚知する時、有為の事相は任運に現ずるといふ。これは次の様に説かれている。

得_レ此心_レ已有爲萬像皆如_レ幻夢_レ。雖_レ見如_レ不見雖聞如_レ不聞。凡所_レ有相分明了知都無_レ所着_レ任運_レ一見聞觸知。譬如_レ明鏡衆像自現_レ。（P 223下）

このような見聞を良遍は自然見・自然聞とも呼ぶが、一心を覚知しても有為の事相は、撥無されず、鏡にその相が映るが如く任運に如実に顕現するのである。

一心の内容が以上の如く理と事を含むものであるならば、この理事は一心においてどのような関係を有するの。三無性門は攝相帰性によって方法を一心に帰するのであるから、良遍は伝統的法相教学と異なり、この一心における理事を別法とせず、一心の体と徳という形で示している。まず心体は「然此門意既以_レ法性_レ爲_レ心體_レ故」（P 211上）と述べられているように、法性であり、いわば真如の理と同義であろう。一方、心徳は「名爲_レ菩提及見色等_レ皆非_レ心體_レ是此心徳」（同右）と説かれる所から窺えるように、自然見・自然聞によって

捉えられた有為の事相であると言えよう。このように一心が心体と心徳として法性と有為の事相とに配されることよりすれば、良遍が一心の内容を事理で以て捉えていたことは明らかであろう。しかも心体と心徳は撰相・婦性より別法とはされないものであるから、一心における事理の關係はまさに相即であると思われる。

良遍はこの事理相即に関して次の様に説いている。まず「言事理者即是事與事之理謂也」（大正71・30C）とし、「一切諸法以理爲性」（P 238下）と述べて、理が相を踏わすことが事、事を性に帰せば理であるとする。そしてそれに続けて「以一切事皆是眞如之相狀故」（同右）として事理の相即を主張するのである。これは『観心覚夢鈔』に「事相若無眞理亦無。眞理非獨眞必俗之眞故」（P 115下）とあることから窺えるが、ここより考えれば、一心における事、すなわち心徳は、理（心体）の具体的な顕現として考えられていたと思われる。もちろん良遍において三無性門は先の兩門の順不でも理性に配されていたように、基本的には撰相・婦性に拠って一切を一心に撰めるものであるから、良遍も「事理」という言葉は用いず、心の体と徳として關係づけているが、その内容から見限り、良遍は三無性門の立場では事理の相即に立っていると思われるのである。伝統的法相教学では事理の關係を不即不離として、事理不即の面を強調するが、良遍は逆に事理不離の面より事理相即を主張するのである。では何故良遍はこのような眞如觀を採ったのか。それは良遍の修行論、特にそこに見られる視点の転換にあったと思われるのである。

この一心を具体的にどのようなようにして覚知するのか。良遍はまず心徳顕現の位を自覚することを主張するが、これは次の様に説かれている。

其心徳顯現位者若人或時不_レ起_レ貧等一切染念住_ニ非執心_ニ於_ニ六塵境_ニ不_レ舉_ニ念慮_ニ而亦明了_ニ必然有_レ之是即
佛心。非_ニ汎爾妄情_ニ是即本有非_ニ始修得_ニ。(P 21下)

すなわち心徳顯現位とはあらゆる染念や思慮を起さず、六塵境を見聞触知せらるるままに捉えている状態であると見えよう。換言すれば有為の事相を自然見・自然聞で以て捉えているということである。そもそも心徳は心体の具体的顯現である。それ故心徳顯現の心を自覚することはそのまま一心を覚知することと同義であろう。換言すれば心徳という具体的事象を通してその背後にある無分別なる一心を自覚するのである。

ここで良遍はこの心徳顯現を始修得には非ずとして、一切衆生に本来的にあるものと説いている。それ故一心たる一心も当然一切衆生に備わっており、そこから良遍は一心を自性清淨心とし、またこの考え方から一切皆成を主張する。しかし衆生はそのまま仏ではなく、煩惱を有する凡夫として仏とは隔歴されている。良遍は凡夫が凡夫たり得るのは「愚夫不知故自廻_ニ六道_ニ」(P 21下)とあるように心徳顯現位が即一心の顯現であることを知らないからであるとすると、それ故「若得_レ知_レ之深信護_レ之常住_ニ此心_ニ不_レ舉_ニ念情_ニ。次第轉勝漸明淨速至_ニ圓滿_ニ」(同右)として、心徳顯現位を以て一心を自覚し、常にその位に住す、すなわち心徳を顯現させ続けねばならないと説くのである。良遍はこれに関して「本來有者論_ニ本性_ニ也。本性雖_レ淨由_ニ他染熏帶垢穢_ニ故若不_ニ磨瑩_ニ更非_ニ覺者_ニ。故修行也」(P 23上)と言っている。すなわち衆生は本来的に仏心たる一心を有するが、その一心は煩惱に障礙されて常に心徳を顯現させることができない。それ故心徳を常に顯現させるためのものとして修行があるとするのである。ここからもわかる様に良遍において修行は煩惱を断じて心徳を顯現させ続けるためのものであり、この修行を良遍は無分別の行と名づけているのである。

この無分別の行はいわば観心を深化させる行でもあるが、その際良遍は徹底的に分別を排することを主張する。まず分別は次の様に規定されている。

強分別者所謂故思安立諸法或執實有或執假有或執實無……如是安立置於意内堅執比度以爲究竟。(P 223上)

すなわち分別とはいかなる物事であれ、それにある判断や規定を下す思慮のことと言えよう。良遍は思慮分別されて対象化されたものはすべて妄境たる遍計所執性であると説き、それ故その妄境を産出する思慮分別を徹底的に排することを無分別の行とするのである。それ故実有・実無と執することはかりか、「以心求心心還外境住空取空空亦情有」(P 208下)であって、思慮された「一心」や「空」もまた妄分別の所産となる。さらには「比門意者既遮一切。有何一心有何菩提。有無一異皆是妄境。菩提涅槃亦不可得。不可得法亦不可得。如此思惟亦不可得」(P 214下)と述べ、あらゆる思惟を排斥して無分別を徹底させるのである。

このように観行が、自己の心を観じて無分別を徹底させることであれば、これは最終的には廢詮談旨の主張へと繋がっていく。このことは無性門の理を「一實廢詮談旨真如理」とすることや、この無分別を「一實廢詮観」(P 212下)としていることから窺える。また良遍は『真心要決』の中で仮実を分別して七重に分けて(5)いるが、その第六重では依詮が仮、廢詮が実とされ、さらに第七重では先の第六重における実、すなわち離言と説くことを仮とし、無言の内証を実と為している。良遍はこの無言の内証を「今此實言亦是假説。内證門中非實非非實非亦實亦非實非非實非非實」(P 245上)と述べて、まさに言亡慮絶の無想無念の心を究竟として(6)いるのである。ここより良遍の無分別行は基本的には廢詮観であり、妄念たる思慮分別を断ずることにより(7)廢

詮談旨の一心に住し続けるための行であると思われる。

このような良遍の観行理解から、私は良遍はいわば事と理の二方向より観行を説明していると考ええる。すなわち心徳を顕現させ続けることが事の方向であり、無分別の徹底によって一心に住することが理の方向であると言えるだろう。良遍において観行は無分別の行である。しかし良遍はその無分別の行を行ずる基点に一心の覚知を置いている。一心はまず心徳顕現位を以て覚知され得るものであり、そうであれば良遍は観行の基点として心徳顕現位、換言すれば具体的な有為の事相を考えていたと思われるのである。この考え方はたとえ心徳の背後の心徳を覚知することが求められているとはいえ、心徳たる具体的な事相を観行の出発点としている点で独特なものと思われる。すなわち良遍は心体（理性）という敢えて言えば幾分抽象的な概念を一挙に心徳（事相）に還元し、三無性門の事理相即の立場からその事相の背後に理が控えているということを前提にして、事相を基点として真如を観ずるという方向を積極的に主張するのである。この事相を重視するという姿勢は良遍の観点が具体的になるものにあつたことを意味しよう。そして観行の基点として理よりもむしろ事の立場に立つというこの視点の転換とも言うべきことが良遍の修行論の特徴であり、その特異性を示すものと考えられるのである。

四、

良遍のこのようないわば具体的ななるものへの志向は特に『真心要決』に顕著である。例えば良遍は観行の際

に「正直之心」に住することを説いている。良遍によれば正直之心は有無一異等の一切の分別を離れたもので、それ故無分別心と内容的に変わりがなく、常にこの心に住することが観行の際の善修とされるのである。この正直之心の主張は、いわば事の方向より一心をより具体的に説いたもので、良遍の具体的なものへの志向が明瞭に表われていると言えるだろう。

またこのことは真如に関する記述からも窺える。良遍は、まず真如を「眞如是心眞實性也」（p.238上）と定義する。そしてその性を「性者即是此心離相眞實道理」（同右）と述べ、さらに「其離相之眞實理者即是緣起之道理也」（同右）として、これを道理即真如の定判と為すのである。ここよりすれば良遍が真如の理を緣起之道理と捉えていることは明白であろう。緣起之道理はそもそも有為の事相の理法としてあるものであるが、これを真如としたことはその視点が有為の事相にあったことを意味するものと思われる。そしてこの見方は、同時に道理眞理説の変質をも意味している。貞慶においては道理は有為の事相の道理であって、無為の理性たる真如とは厳然と区別され、しかもその道理は真如を悟る方便とされていた。しかし良遍は有為の事相の道理たる緣起之道理をも真如となし、道理を方便と捉えない。良遍において観行は三無性門に順じており、事理相即の立場であるから有為の事相の道理であっても真如と異ならない。また良遍は緣起の道理を知るとは諸法の因縁生を知ることであるから僻執・妄執は断ぜられており、道理即真如に他ならないと主張する。このような良遍の見解からもわかるように、ここで良遍は道理即真如をいわば事相の側から説明しており、ここからも良遍の視点が具体的なるものにあつたことは明らかであろう。むしろこのような道理眞理説の変質は良遍の視点よりすれば当然の論理的帰結であつたのである。

このような道理眞理説理解の相違は、より根本的には両者の唯識観理解の相違とも関連する。これまで述べてきたように良遍の観行は妄分別を遮して一心に住するといふものであったが、特に妄分別を遮すという点において伝統的法相教学で説く五重唯識観の中の第一重である遣虚存実観に相当すると思われる。これは「未見_レ解釋_一且私推云雖_レ皆深妙_二而第一重爲_レ最要_一歟。何以然者一切唯識之大體故。後後重重從_レ此開故」（P 233上）とあり、良遍が遣虚存実観を最要と爲し、観行の基本とする立場であることはこの記述から窺える。ただ、この遣虚存実観の重視は貞慶にも見られ、貞慶は『眞理抄』の中で「論_七云。我法非_レ有空識非_レ無離_レ有離_レ無故契_二中道_一文是則五重唯識中遣虚存實唯識也」（日大藏63・P 38下）とし、さらにこの観を「一宗大綱也。自餘重重未_レ離_二此重_一以後後重_レ還成_二初意_一」（同右）と述べてその重要性を指摘する。しかし貞慶は「故章結_二初重_一云。故欲_レ證_二入離言法性_一皆須_レ依此_二方便_一而入_上云。離言法性者聖位所證也。地前方便不_レ超_二遣虚存實_一」（同右）と述べて遣虚存実観は方便として考えられているのである。これに対して良遍の理解は貞慶とは若干趣を異にする。良遍は次の様に説いている。

此觀大意子鳥釋云。其遣虚之下遣_二遍計所執_一了者觀_二依圓_一二性_レ存_レ實之義自然顯了。是即一念之中有_二遣虚存實義_一也_文肝心在_レ此歟。（P 233上）

ここからわかるように両者とも遣虚存実観の重要性を指摘しながら、貞慶は慈恩を、良遍は子鳥を証文に挙げており、両者の違いはこの証文だけをとつても明確であろう。良遍は貞慶と異なり遣虚存実観を方便とはせず、むしろ存実_二に力点を置いてその意義を貞慶より拡大せしめるように思われる。良遍においては虚を遣つた後に存する実_二は心徳であつて眞如の顕現であり、それ故存実を重視していると思われる子鳥の釈を引用したの

であろう。このような遣虚存実観の存実の側面を重視することは、やはり良遍の視点の独自性に拠るものと考えられる。

さらには、良遍は依他の体に閑して無分別観を徹底して、依他の体性を仮似と捉え、それ故に生滅も似生似滅であって一切の定相は無い、と説いた後で次の様に述べている。

是故説名一切唯識無定實境界亦心故。或亦容言一切唯境無定實心亦境故。（P 239上）

この「一切唯境」の主張はまさに良遍の独自性を表わしているよう。これも有為の事相を重視し、事理相即の真如観を立てない限り説かれ得ないものと思われるのである。このように『真心要決』には事を重視する姿勢が無ければ説け得ないことが所々に説かれており、良遍の教学を独特なものとしているのである。

以上述べてきたように、良遍の思想は伝統的法相教学とは異なり、観行の基点としての現実の事相を重視するが、良遍教学の基礎的構造とも言い得る三性門―三無性門の相対もこのような視点から導かれたものと思われる。法相教学には四重出体とか四俗四真説などの教学分析のための様々な観点があり、貞慶まではその観点に基づいてそれをより詳細に検討する傾向が見うけられていた。ただ、この三性門―三無性門の考え方自体は貞慶にも見られ、それよりすれば良遍は貞慶の思想を継承しているとも言えようが、貞慶においてはこの相対はいわば指摘されるのみに止まり、良遍の様に教学全体の基礎的構造とは言い難い。それ故良遍教学の特徴としてこの三性門―三無性門の相対が挙げ得るのであるが、この相対を為し得た根拠として、私は『真心要決』における観行の重視があると考えるのである。前述したように良遍において観行の基点はまず有為の事相（心徳）にあり、この事相を観することから無分別の行が始まるのだが、この様な観行を論理的に根拠づけるた

めに三性門—三無性門の相対が用いられたと思われるのである。そもそも三性三無性はいわば諸法を有の側面と空の側面から捉え、現実の諸法の有り様を問題とするものである。そうであれば観行の際に具体的なるものへの志向へと傾く良遍の思想よりすれば三性三無性の相対で以て自己の教学を構築するのは、いわば当然とも言えるのではなからうか。このように考えると良遍が『真心要決』で三性門—三無性門相対の構造を用いたのは、良遍が事相を重視するというその視点に起因すると考えられるのである。

五、

ところで、このような良遍のいわば特異とも言える思想は果たして法相教学の枠内に止まるものであろうか。ここではその真如観を取り上げて若干の考察を加えたい。

良遍の観行の基点は心徳顕現位であるが、この心徳は一切の分別を断じた所に顕われる、理の相状としての事であった。この良遍の心徳に対する見解は伝統的法相教学よりすれば内容的には無漏有為、もしくは漏無漏門の円成と同義であろうと思われる。漏無漏門の円成は『成唯識論』に「無漏有為離倒究意勝用周遍亦得此名（『円成実』）（大正31・P46中）」とあり、それを証文として貞慶の『法相宗初心略要』には「有漏無漏相對有漏名依他。無漏有為無為名圓成也」（旧大蔵63・P361下）」とあるが、この内容よりすれば良遍の心徳と同義であることが明らかであろう。良遍はいわば事相重視の立場から漏無漏門の円成を三性門—三無性門相対の中、三無性門の立場に置き換えているのである。

さらに真如に関して、良遍は真如を真理、もしくはは道理と捉えており、その理は常に事を事たらしめる凝然常住なるもの、すなわち諸法の所依体として論じられているように思われる。良遍は三無性門の立場から心徳を立てて事理相即を主張するが、三無性門において事はあくまでも理の相状としての事であつて、心徳そのものが即真如とはされていないのである。このように考えると、良遍の真如観は事理相即を説きながらも真如を諸法の当体体ではなく所依体とする点で、華嚴教学や天台教学とは一線を画するものと考えられるのである。

この点よりすれば良遍の教学は法相教学の規矩からは外れていないと言えるだろう。むしろ良遍は法相教学の立場を守りつつ、自己の独自の視点より法相教学を捉え、それを再構成したと言えるのである。

六、

以上、『真心要決』を中心に良遍の観行理解について考察を加えてきた。良遍は鎌倉旧仏教諸宗派の改革者の中でも特に観行を重視した人であると思うが、良遍は自己の観心の深化を伝統的法相教学の中の漏無漏門の円成に見出し、それを三性門―三無性門の相對の構造において三無性門たる不離門の強調という形で論理づけたのではなからうか。そしてその三無性門の強調は、良遍が観行を重視するという姿勢から導かれ、修行を三無性門に配することで事理相即に基づいた独特の修行論を展開するのである。これは良遍以前には見られないもので、まさに良遍教学の不具の特徴とも言い得るが、このような独自性を發揮し得えた背景には良遍が有為の事相を観行の基点に捉えていることがあるだろう。そしてまさにこのことが良遍の教学を独特なものとした

のであり、良遍の唯識観の特異性はまさにこのような視点の転換にあったと考えられるのである。

注

- (1) 貞慶の道理真理説に関しては、間中潤「貞慶における道理真理説の考察」(仏教学研究、第四十二号)を参照。
- (2) 一心という語は銀行の見地から真如をそう呼んだものと思われる。
- (3) 本論文中の引用で特に出典の明記されていないものはすべて『真心要決』からの引用である。『真心要決』は『日本大藏経』(鈴木学術財団)第六十四卷・法相宗章疏二に拠る。
- (4) この箇所のみ『大正新脩大藏経』本を用いた。『日本大藏経』本では意味が通りにくいと判断したためである。
- (5) 『真心要決』日大蔵 64・P 245上。
- (6) 「其善修者所_レ謂常住_二正直之心_一也……正直心者無_二妄曲_一也無_二妄曲_一者無_二曲念_一也無_二曲念_一者不_レ起_二一切有無一異俱不俱等強分別_一也」(P 223上)
- (7) 『法相宗初心略要統篇』には、「私思惟云。凡三性二門相對之時三性有門中道也。三無性空門中道也」(日大蔵 63・P 408下)とある。

(人文科学研究科 博士後期課程 哲学専攻)